

悪魔の子

春風きらり

リラル



私は、悪魔の子。

本当の人間ではなく、人間を装って生きているもの。

兄だと慕っていた者が、母だと甘えていた者が、私を監視する為の偽家族だったとは。

幼い頃から、悪の世界とは関係のない、まるで聖者か、もしくは精神異常者か、第三者から見れば、そう思える教育を受けてきた。そうする事で日々の言動を規制し、闇からの使者の目を欺く。私を再び魔の世界へ戻さない為に。

どんなに規制をしても、本性というものは隠しきれるものではない。一度、現れ始めたそれは困惑と共に大きくなり、魔の世界のものに見付かってしまった。

私は、悪魔の子「リラル」。

魔の世界へ戻るのか、このまま人間として生きていくのか選べど、同じ悪魔の子ジェイドに言い渡された。一度、魔の世界へ行こうと決めた。あんなに恐怖を感じていた魔の世界。なのに、何故か懐かしく心安らぐ自由な世界。

しかし、私を心配してくれる者たちが、私を人間の世界へ戻してくれた。善をうたう世界へ。少し窮屈な世界へ。心の奥底には悪が渦巻いている世界へ。私の中にも完璧な善はない。だけど、私を心配してくれる者がいるのだから、今は人間として生きていこう。

まだ、完全には悪の心ではないようだから。

街の中の交差点、信号がまだ赤なのに、子供が飛び出した。青信号で走って来た車の運転手は、慌ててブレーキを踏む。街の中、車の制限速度は時速50キロ。飛び出した者までの距離、5メートル。どんなに急ブレーキをかけたとしても、50キロ近い速度で跳ね飛ばされた。キイイー、ドオオーン。子供は宙をいく。かなり離れたアスファルトの上にゴロンと落下し、身動きひとつしない。手足は投げ出され、人形のように無表情な顔。頭のある所には、黒い血が広がり始めていた。一瞬の出来事。

母親が泣き叫ぶ。信号が青に変わった。辺りにいる人々が自分の思うように動き出した。私たちは交差点の前に停止する。歩行者たちは、横たわる子供の周囲に円を描く様に集まっている。中には、急ぐ用でもあるのか、信号を渡って行ってしまう者もいた。

さおりは、交差点を渡らずにじっと立ち尽くしているひとりの男の子を見つけた。思い思いに動いている歩行者の中に、そこだけ時間が止まっているかのように男の子は動かない。ただ、跳ね飛ばされた子供と泣き叫ぶ母親を見ているように、人垣の一点をじっと見詰めている。その男の子の口は笑っていた。驚きと恐怖の表情の人間たちの中で、ただひとり、笑みを浮かべている男の子。異様な光景。さおりは自分の体の中で何かがざわざわと動く感じがした。

突然、新たな悲鳴が起こった。停まっているはずの車が一台、人垣めがけて突っ込んできた。逃げ惑う人々、地に倒れる人々。それは、まるで地獄のような光景。

「さおり」 隣で、さおりと同じようにこの光景を見ている美咲が呼んだ。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。